アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫

前回のまとめ

Ⅰ．　すずは何故歌えなくなってしまったのか？

高校生のすずが歌えなくなった要因として、彼女が幼い頃、母を水難事故で亡くなってしまったことが、依然として受け入れられないことが大きいと考えられる。

１）悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

「母さんは、なぜ私を置いて川にはいったのか？なぜ私と生きるよりも、名前の知らないその子を助けることを選んだのか？なぜ私は一人ぼっちなのか？なぜ、なぜ、なぜ。」

すずが上記の言葉を高校生になった今も発しており、そして上記のような思いを何度も何度も書き殴っては捨てているということを繰り返しているように、喪の作業を整理できず、今も②と③の間を行き来し続けているように感じられる。

　喪失が受け入れられない、つまり、喪の作業が進まないと、その後の喪失の場面の際に同じ様に対処できなくなってしまう。

そしてその喪失がすずにとって思春期にあたる。

２）思春期の喪失とは？

思春期になると、心身の成長の中で、主体性が立ち上がり、学童期まで抑え込んできたエディプス葛藤が再び持ち上がり、子どもは自分自身のアイデンティティが揺らぎ、その中でいくつもの課題を抱え、喪失・選択・幻滅・独立といった情緒的葛藤を重ねながら（それが Adolescence Process）乗り越え、一人前の大人に成長していく。

しかしすずは母の喪失が受け入れられないが故に Adolescence Process に伴う喪失・選択・幻滅・独立を受け入れられず、主体的になれず、殻に閉じこもるような生活を送っているように感じられる。

→cf 「あの花」のじんたん

３）ではなぜ、すずは歌えなくなったのか？～潜在空間と移行空間～

潜在空間とは

母に見守られながら、思うがままに子が対象を発見し、その対象を思うがままに

使い、遊びを許容する空間　（「クラインとウィニコット」P78 参照）

その様がこのアニメで、すずの幼い頃の母との思い出に鮮やかに描かれている。それは、幼い頃のすずが、母のスマホをいじる中で音楽制作の為の鍵盤のアプリを見つけ、それをいじるようになり、すずはそれに夢中になり、必死に音楽を作り、それを母に聞かせ、それを母が微笑ましく見守るという幸福な空間が描かれたシーン。

　すずは鍵盤アプリという対象を発見し、それを自分のものとして、使い、母に見守られながら、遊び、徐々に外的現実に触れていこうとしていった。つまり母のスマホが、すずにとっての**移行対象**であり、母に見守られながら、すずは夢中になって遊び、音楽を作るという創造的な体験をしたその空間こそが潜在空間と考えられる。

→しかしそのすずの潜在空間は母の突然の死で、なくなってしまった。

　すずにとって歌うということは母の思い出を想起させられることである。そ

れだけでなく、歌うと言うことは、潜在空間を経て、外的現実に触れていくことをすずにとって意味する。母の喪失、そして思春期に伴う喪失を受け入れられないすずは、外的現実に触れることを避け、それゆえに歌えなくなり、、なにか殻に閉じこもるかのように、そういう情緒的葛藤から距離をとり、『月の裏側（ヒロちゃん評)』のようにひっそりと高校生活を送り続けていたと考えられる。

　一方で、彼女自身、クラスで盛り上がっている中にも入りたい思いもあり（カラオケでマイクを渡されたシーンを参照)、そこに入れない自分に忸怩たる思いを抱き、沈下橋の真ん中で歌おうとするが、歌にならず、すずは嘔吐してしまい、橋の上に倒れてしまう。

→すずには幼い頃母に見守られながら夢中になって歌い、音楽作りをしていた空間を取り戻す必要がある。つまりもう一度、潜在空間で自由で創造的に遊べる様になることが必要。

→そこで、ヒロちゃんから『U』の招待を受ける。

Ⅱ．すずにとって『U』とはどのような存在であるか？

1)『U』とは？

『U』とはもうひとつの現実

「As」はもうひとりのあなた

現実はやり直せない

でも『U』ならやり直せる

すずにとっての潜在空間は母の突然の死で、なくなってしまった。

つまり現実ではもう一度母に見守られながら夢中に歌っていた空間をやり直すことはできない。

　けれども『U』を用いてもう一度潜在空間を作り出せることを意味している様に感じられる。

つまり『U』はデジタル技術が得意なヒロちゃんに見守られながら、すずが歌に没頭できる（主体性が確立できる良いようにする）潜在空間であると考えられる。つまり、母の死で失ってしまった、すずの潜在空間のやり直しをヒロちゃんが提供したと考えられる。

そのなかで、現実世界のすずは歌えることができなかったが、『U』の世界で、ベルになることで歌うことができた。それと同時に現実世界の高校生活が少しイキイキと感じられ、彩りを持ち始めている様に描かれている。

そして初めは誰も見向きもせず、全く評価されていなかった彼女の歌声は瞬く間に高評価をうけるようになっていく。

すずはこれまで悪意の書き込みに苦しめられ、そのことがより彼女の自信を喪失させ、自身の殻に閉じこもってきたが、悪い評価が良い評価を凌駕していく

中で、すずの自己肯定感が高まっていくように感じられる。